

ピースボートおりづるプロジェクト

おりづる全国証言会#5 「今あらためて、日本全国に被爆者の声を届けたい@沖縄」

沖縄での証言会は、沖縄本島南部（宜野湾市）と北部（名護市）との2カ所で行いました。クラウドファンディングの際に、趣旨に賛同して寄稿文を寄せてくれた方、またおりづるプロジェクトに関わったことのある元ピースボートスタッフが沖縄に住んでおり、ぜひ自分たちが暮らす地域で証言会を開きたいとのことから今回沖縄での開催が決まりました。以下に各回の様子を報告します。

宜野湾市

開催日 : 2019年2月9日（土）
開催場所 : 佐喜真美術館
対象 : 約30名
証言者 : 天野文子さん(広島被爆者)、玉木利枝子さん(沖縄戦体験者)

証言会の内容

- 佐喜真美術館と「沖縄戦の図」の紹介（15分）
- 玉木利枝子さんの沖縄戦の証言（45分）
- 天野文子さんの被爆証言（50分）
- 玉木さんと天野さんのお互いの証言を聞いての感想（10分）
- ピースボートとおりづるユースの紹介（5分）
- 懇親会（45分）

2月9日は沖縄県宜野湾市にある佐喜真美術館で証言会を行いました。ここは、米軍から一部返還された普天間飛行場の用地に建てられた美術館です。屋上から普天間基地を見下ろすことができます。ここでは「原爆の図」の作者として有名な丸木位里・丸木俊が描いた「沖縄戦の図」が常設展示されています。

そのような環境の中、まず玉木利枝子さんに沖縄戦の証言をしていただきました。沖縄戦が始まったのは玉木さんが10歳の時です。10人家族で唯一、玉木さんだけが生き残りました。日にち感覚は全くなく、ずっと逃げ回っていたそうです。どこに行ったらいいのかわからないけれど「ここ」にいるのは危ないから移動するという状況だったと言います。ある日、逃げ回っていると、また集中射撃がはじまりました。玉木さんがじっと伏せていると、背後にいた玉木さんのお祖父さんの身体に破片が刺さり、うめき声が聞こえました。玉木さんはすぐに叔母さんに石垣の影に連れて行かれましたが、お祖父さんの声は聞こえる範囲。その後聞こえてきた、自決を覚悟したお祖父さんの人間の声とは思えない声が忘れられないそうです。「これが戦上なんです、人間の努力とか、そんなものは通用しないんです」と、玉木さんは涙ながらに話してくださいました。「当たり前にある日常は当たり前ではなく、それは平和だから。そして、命があるのも決して当たり前ではないと知ってほしい。」沖縄で、沖縄戦の絵をバックに紡がれる玉木さんの言葉が沁みました。



続いて、広島で被爆した天野文子さんに被爆証言をしていただきました。広島に原爆が投下されたのは天野さんが14歳の時です。本来であれば原爆投下時の8時すぎには爆心地の島病院にいるはずでした。しかし、その日は予定よりも遅くに向かったため、投下時は広島駅の近くの交番にいたそうです。交番のロッカーの前に立っていた瞬間に、原爆がさく裂しました。家に帰ろうと歩きましたが本当にたくさんの人たちが倒れていました。「ごめんなさいね。暑かったでしょ。苦しかったでしょ。私も死ぬはずだったのに…。」と言いながら歩いたそうです。倒れている人よりも生きている自分が怖いと思ったとの一言が印象的



でした。天野さんは元々軍国少女だったそうですが、この体験をした時に「本当の戦争」の意味、「戦争は人殺しだ」ということを突き付けられました。証言の中で天野さんは「生きている人が歴史の証人なのです。今も歴史をつくっている。未来を作っている。歴史から学ばなければ死者は報われません。だって、死体は話せないから」と訴えていました。天野さん最後は「命はかけがえのないもので、戦争は絶対にあってはならない。戦争で世界は変わってしまう。みなさんに希望を託したいと思います。」と涙を浮かべながら締めくくりました。

その後は玉木さんと天野さんがお互いの証言を聞いての感想を交わしあいました。その中で、「広島でもあった」「沖縄でもあった」と二人が互いの経験に共感する姿が印象的でした。「これからもお互い頑張りましょう」と声を掛け合う場面も。玉木さんも天野さんも、証言をしながら涙ぐむ場面がありましたが、お二人とも「その時の状況が蘇る」と仰っていました。思い出すだけでフラッシュバックするような体験を話さないという選択もあります。それでも話してくれるのは、自分たちにしか話せないことだと思うから、同じことを繰り返してほしくないという強い気持ちがあるからなのだと改めて強く感じました。

名護市

開催日：2019年2月11日(月・祝)

開催場所：名護市久志支所

対象：約20名

証言者：天野文子さん(広島被爆者)

証言会の内容

- 天野文子さんの被爆証言(75分)
- 天野文子さん、おりづるユース鈴木慧南さん、三線がーる稲嶺ゆきのさんのトークセッション(20分)
- 三線ライブ(15分)

2月11日の証言会は、名護市にある大浦湾の近くの久志支所で行いました。地元名護の方や沖縄市の人など、沖縄各地から参加者があつまりました。この日、天野さんは証言の冒頭で沖縄の辺野古について触れ、ご自身の沖縄への思いを集まってくれた人に話しました。天野さんは聞く人がどんな人なのかによって証言内容を考えます。沖縄で戦争経験がある人や沖縄戦争のことを小さい頃から聞いている人へ向けての証言会ということもあり、夜も眠れないくらい悩んで言葉を選んだそうです。自分の体験を語るときに、常に相手を尊重し、「伝わる言葉」を選ぶ天野さんはとても素敵だと思いました。そして、広島で被爆体験をした方

が、沖縄での証言をするにあたって、伝えるべきメッセージを迷いながら選ぶ姿を目の当たりにし、広島の実験も沖縄の実験も、それを体験した人にとっては本当に悲惨なものであったのだということを改めて実感しました。この証言会では天野さんは被爆体験は短くまとめ、丁寧に話していました。



証言のあとは、天野さんとおりづるユースの鈴木慧南さん、三線が一の稲嶺ゆきのさんとのトークセッションを行いました。鈴木さんは核兵器禁止条約への賛同を求めるヒバクシャ国際署名 (<https://hibakusha-appeal.net/>) で活動しています。稲嶺ゆきのさんは、ピースボートに乗船したことがきっかけで一旦辞めていた三線を再び始め、さらに乗船中に初めて聞いた被爆証言に動かされ、今は三線が一として唄で想いを伝える活動をしています。鈴木さんと稲峰さんはそれぞれ、今の活動内容や始めたきっかけ、今後どうしていきたいのかなどを話してくれました。二人

とも、自分にできることを考え実行しています。活動内容は異なりますが、核のない世界を目標に活動しています。同世代の私はとても刺激を受けました。

最後の三線ライブでは、みんなで手を叩いたり、みんなでサビを歌ったり、みんなで手を繋いだりしました。このライブがあったおかげか、会が終わってからも天野さんと参加者が楽しそうに談笑しており、証言会をただ話を聞く一方通行の会で終わらせない工夫が大事なのだと実感しました。

これからの私たちにできることは、過去に起こったこと、そしてそれらから今につながる問題を自分たちに関わる話として伝えていくことです。今でこそ、まだ被爆をした人から証言を聞くことができます。しかし、被爆者の平均年齢は82歳になりました。直接証言を聞ける時間は限られています。被爆証言を、自分たちの日常生活に関係ないと考えず、過去の話としてとらえるのではなく、私たちの今に深くかかわる問題として捉えられることができれば、それは、平和な世界をつくるための1歩になるのだと強く感じました。



文責：下坂朱乃（ピースボートスタッフ）